

須恵 ともに生きるまち

2006 年頭のあいさつ



須恵町議会議長
長澤 誠司
ながさわ せいじ



須恵町長
中嶋 裕史
なかしま ゆうし

照 顧 脚 下

新しい年を迎えられ、初春の御慶びを申し上げます。

昨年は、空前の福岡西方沖地震において、罹災されました方々に心からお見舞い申し上げます。

そして、JR西日本の未曾有の列車事故、さらに年末にかけての悪質な耐震性偽造による違法建築や、小学生女児連続殺害事件など、命の尊さを微塵も感じない、快楽や利潤追求がもたらした「エゴ」による事件が多発いたしました。

またその間に、郵政の民営化法案の真（信）を問う突然の解散総選挙の実施、いま「日本丸」は、改革の荒波を航行していますが、言葉からの意味は「改革」は静かに進行することであって、一挙に進めることは、それは「革命」と言うものであります。

一方、地方も分権改革を進めていますが、改革である以上住民の生活に不安を与えてはならず、安心・安泰であってこそ改革の本旨であると思えますが、国は構造改革のもとで「儲かる社会」の追求や、「競争性」を優先し、小さな単位は非効率との理由で大きな組織を過信し、挙句の果てに勝ち組み負け組みといった貧富の差は拡大、利益追求の為なら商道徳も顧みない「弱肉強食の市場」と化してきました。

さらに、肥大化した新しいコミュニティの中で他人同士が増加し、「家族の絆」や、「向こう三軒両隣」といった、自助・互助・扶助の精神が薄らぎ、国政のためなら地域事情は二の次という、極端な発想へと繋がらないかと懸念されます。

それは、為政者が、構造改革の先ほどのような社会がくるのか、どのような社会を目指すのか、将来像を示してこなかった説明不足にあるように思います。

また、過度に集中した権限や財源を地方に委譲し、「地方に出来ることは地方の裁量に」という、小泉首相の音頭で推進され、地方側も支持してきた「三位一体改革」についても、故後藤田氏の「省益を忘れ、

我々は、今こそ一人ひとりが、あるべき自分の姿を見つめなおし、日本の素晴らしい伝統・文化であった「相互扶助の社会」を復興し、使命感に燃えて、「人倫」の形成に努めなければならないと思います。

行政の真価が問われる時代

新年明けましておめでとうございます。町民皆様には、健康で希望に満ちた初春を迎えられましたこととお喜び申し上げます。

旧年中は、当議会に対しご支援とご理解を賜わり誠に有難うございました。我々議員一同、本年も皆様の負託とご期待に添うべく町政の向上、発展に懸命に努力してまいり所存でございますので、よろしくお願い申し上げます。

さて、地方行政を取り巻く環境は、年々厳しさを増し大きな変革の時期に遭遇しております。国と地方の税財政を見直す三位一体の改革、行政システムの見直しを始めとした構造改革など地方分権の推進により、今後はいろいろな状況において地方自治体自ら選択を判断し、責任を負う未だかつて経験したことがない新たな事態に直面し、まさに行政の真価が問われている時代といっても過言ではありません。須恵町におきましても、歳入においては長引く不況により町税の収入増は見込めず、国からの交付税補助金等の削減により歳入の確保が非常に困難になっております。

また、歳出では国からの権限委譲に伴い、法的に支出が決められている扶助費などの義務的経費や清掃施設組合、介護保険広域連合、消防組合等の一部事務組合への負担金、国民健康保険など各特別会計

国益を想え」の訓示は生かされず、今回の政府・与党合意は、単に数字合わせであり、「評価せず」と地方六団体からは、批判や不満が集中する結果となりました。

今日、財政の再建は内政上の重要な課題でありますが、局面は財政危機から社会的危機へと飛び火しています。

一昨年、内閣府の世論調査において、半数以上の国民が少年非行・ひきこもり・自殺といった社会的病理現象や犯罪等、治安の悪さを理由に「今の日本は安心・安全の国ではない」と答えています。

このことは、「幸福」を「快楽」とはき違え、教育をはじめとする戦後の日本社会に、迷妄があったからと指摘されています。

そして、自由は「わがままに」、人権は「独り善がりに」、モラルは失墜してしまっています。

また、少年院に入っている少年の父母に「子育てについての意識調査」の中で、子どもの非行の原因は何かとの間に、「本人の問題」「交友関係」と答えられた親が九割もあつたのに対し、「家庭に問題があつた」と答えたのは僅かで、子どもの非行を他に転嫁し、自らの責任と受け止めようとしない両親が多いという調査結果を見て、指導力不足の親達が増えてきた現実に危惧しています。

中国の故事に、「一年の計は稲を植えよ、十年の計は木を植えよ、百年先を思うものは人を育てよ」という教えがありますが、わが国の先人達にも、米沢藩の上杉鷹山や長岡藩の米百俵など、素晴らしい歴史の教訓があります。

そこで、「照顧脚下」という言葉ですが、鎌倉時代の禅僧の言葉で、「自分が拠って立つところを見極める」という禅の極意だそうです。

言い換えるならば、足元を照らして自分自身をよく見、よく己を知れということだと思えます。

平成十八年丙戌の年が、町民皆様にとって幸せで飛躍の年になりますようお願いいたします。念頭のあいさつといたします。

への繰出し金などが大幅に増加し、収支のバランスを取るのが難しく、これまで町の貯金として積み立ててきた財政調整基金の取り崩しにより、調整を図っている状況です。

議会としましては、このような現状を踏まえ議会の使命である政策決定にあたっては、その政策の緊急性、経済性（対費用効果）を考慮し、また決定された政策が効率的、効果的に行われているか今以上に住民の立場に立った調査、監視を行っていくかなければなりません。また議会自らも研鑽を積み積極的に政策提言を行うなど、よりよい町政を目ざし議会の活性化を図っていく所存であります。

一方、議会の運営、組織に目を向ければ制度的に時代にそぐわなくなつたものについては見直しを行い時代に合った制度の構築に努め、また経費面においては徹底的な節減を行い、さらには合併問題を視野に入れた議員定数削減の問題にも踏み込んでいきたいと考えています。

このように誠に厳しい時代を迎えています。執行部ともども一丸となつて、この難局に対処していく所存でございます。どうか、皆様方の格別のご理解とご協力を切にお願い申し上げます。ごあいさつといたします。